慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ノーベック著『高島』
Sub Title	Norbeck, Edward : Takashima
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1955
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.28, No.12 (1955. 12) ,p.56- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19551215-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Norbeck, Edward TAKASHIMA

A Japanese Fishing Community, 1954

ノーベック著『高島』

一

過去一世紀におけるコミュニケーションの急速な發展によつて、世界は著しく狹くなつたにもかかわらず、他國民を理解する適切な方法は、それらに立遲れて發達するのがつねであつた。しかし二度にわたる世界大戰の深刻な經驗によつて、この種の組織的な研究方法の必要性が改めて認識されたのである。

本書は、このような現代的要請に從つて行われた米國における日本研究の成果の一つと見做される。著者ノーベックは、戰後ミシガン大學の日本研究所（Center For Japanese Studies）が岡山市に設置した現地分室に勤務したことのある人類學者であり、日本研究所が企畫した「日本社會の全機構の解明を目指す日本地域の繼續的な調査計畫」の一コマを擔當した研究員の一人である。從つて、本書を理解するためには、一應、日本研究所の組織、企畫、調査方法などを知つて置くことが便宜であろう。

二

一九四七年ミシガン大學に設置された日本研究所は、日本地域に關する專門家の養成と各專門家による組織的協同研究の實施を目的とし、とくに「日本の固有文化に與えた西洋文化の衝擊の結果」の探求を一般課題として、次のような諸項目からなる現地調査に從事した。すなわち、個人と國家、個人と個人、個人と家族、家族と地域社會、人間と土地、人間と傳統的な宗教、道德、倫理的價値などの諸關係にその衝擊はどのような結果をもたらしたか、或は、教育、飲食、健康、衞生、生計の問題および個人の經濟的保障の問題などに如何なる變化が起つたか、といつた點について現地調査を行つたのである。

そこで、研究計畫の中樞部をなす現地分室は、「日本文明の搖籃の地日本歷史の完全な野外劇の演ぜられた瀨戸內海沿岸の好位置を占める」岡山市に設定され、まず、「單純なものから複雜なもの へ」の順序に從つて、岡山近邊の三つの地域社會が研究對象に取上げられた。調査の實施に當つては二つの調査方法が用いられた。第一の方法は、比較的單純な瀨戸內農村のうちから選出された、二十二世帶、百二十六人の構成するN部落を、地理學、民俗學、人類學、政治學、經濟學、文學、歷史學の各專門學者のグループによつて、綜合的に集中調査することであつた。そのためには、各專門學者は、その地域の環境と社會機構についての廣くかつ深い綜合的知識を身につけ、日本語に堪能であるとともに、相互の專門領域をも十分に理解し合うことが要請されたのである。しかる後にN部落についての「草の根も分ける」ような綿密な集中的協同研究が行われ、ことN部落に關する限り、あらゆる側面からの調査研究の結果が記錄さ

れた。それらの記錄はカード・システムによつてファイルされたが、一應、全てのカードはミシガンの本部に郵送、批判されて再び岡山に返送される仕組になつていた。それは現地における再調査によつてカードを修正し、その科學性を高めるためである。このような調査手法は、後に述べるようなマードックなどの提唱する「人間關係地域分類所」(Human Relations Area Files) の基準に概ね準據しているように考えられる。

それはともかくとして、N部落の綜合調査は、(イ)全體社會の見本(ロ)比較研究の資料 (ハ)地域的差異の事實、などを確保しながら、次の調査段階の基準を作りあげつつあつたのである。見方によれば、嚴密な豫備調査の段階に相當するものと考えられる。次の第二の方法は、N部落の調査を基準にして、その全體的骨組に從いながら、各專門學者がおのおのの專門領域の許す範圍内で各自の問題を發見し、それぞれ獨自に問題解明のための調査を實施することであつた。

このようにして、同じく岡山近邊の特定の漁村Tおよび山村Mの二つの地域社會の集中研究が以上の線に沿つて展開された。のちに至つて都市の研究も計畫され、現在では、N、T、Mの各部落ならびに四國および全日本の五つに分類されたファイルが集積されている。けだし、それらを通じて終極的には日本の文化傾向、その要因などを解明しようとしているといえよう。

なお、米國の各大學が行つている外國諸地域の研究は、例えば、コロンビヤ大學とハーバード大學のロシヤ研究、ペンシルバニヤ大學の印度およびその近隣諸國の研究、エール大學の東南アジア研究、ミネソタ大學のスカンジナビヤ研究、トューレン大學のラテンアメリカ研究などのように、それぞれの特色と權威とをもつているが、日本地域に關する研究では、ミシガン大學のそれが最も組織的かつ權威あるものと見做されているようである。

三

さて、本書は著者ノーベックが彼の夫人とともに、前に述べた第二の方法によつて、三十三世帶、一八八人よりなる瀨戸内海の小島高島部落を調査した結果を纒めたものである。本書は七章からなり、日本の漁村地域社會を、とくに西洋化 (Westernization) の觀點から、民族誌學的 (Ethnographic) に記述することを目的としているが、終極的には、日本文化の或種の傾向の解明に接近しようとする點で、研究所自體の目的にも一致している。

調査は昭和廿五年八月より翌年四月までの九ヵ月間を要したが、最初は岡山市より二十二マイル離れた高島へ日參することによつて資料が收集された。その後、著者夫妻は高島に居住し、著者自身の日本語による日常會話を通して多くの情報提供者に面接し、いわゆる參與者觀察法 (Participant Observation) によつて調査のしめくくりを行つている。また、高島は、岡山縣下のすべての漁村地域社會が一應踏査された後に、それらのなかから「比較的他の地域社會、とくに大都市から孤立し、しかもなお特殊事情の少ないところ」といつた基準で選拔されたのである。

各章の内容は終始一貫して民族誌學的記述にあてられており、およそ高島の生活に關係する現象はすべて丹念に記錄され、われわれ日本人からみれば、或は見過してしまうかも知れないと思われるよ

うな瑣細な事柄にまでも細心の注意が拂われている。N部落の綜合調査の場合もそうであるが、本書も當然準據したと思われる人間關係地域分類所の「文化資料の輪郭」(Outline of Cultural Materials) には、およそ人間の文化に發見されるあらゆる文化現象を八百八十八項目に分類したキャテゴリーがあげられているが、高島の場合も、恐らくはそれに準ずる程度の諸項目が本書の全般に配列されているものと考えられる。

四

本書に記述された諸項目は、われわれ日本人にとつて別段目新しいことではないので、今更それを詳しく紹介する必要もないであろうが、一應その概略を示せば次の通りである。

第一章 (Introduction)、第二章 (Gaining A Livelihood)、第三章 (The Household and House Life) の各章では、高島についての地理、歴史、人口、職業、收入、支出、家族構成、親族關係、衣食住の生活樣式、疾病、娯樂などについて述べられ、漁民と農民との習慣の相違および兩者の相互評價がやや分析的に取扱われている。漁民は農民に比較して一般的に社會的威信が低いとされているが、高島の漁民は、嘗つての農民からの轉職者であることにいまだに誇りをもち、近邊の他の漁民とはやや異なつた習慣をもつていることが理解される。

次の第四章 (The Buraku and The Community) では、高島の部落共同活動、行政組織、近隣市町村との關係が取上げられ、それら地域社會における社會的差別 (Social distinction) に作用する諸要因のうちで、經濟的富は最も重要な要素ではあるが、それ以外に、教育、職業、人柄、同族、カストなどの諸要素が、いまだにそれ相應の影響力をもつていることが指摘される。それと同時に、それら諸要因の影響力の比重が、高島における西洋化の過程のもとに、如何に變化してきたかを辿ろうとしている。

第五章 (Religion) には、高島における各種の宗教的行事、俗信、禁忌などが列擧され、それらのあるものが時代とともに衰微しまた年齡層の相違によつて著しく異なつた評價を受けていることが示される。しかも、すでに滅亡しつつある多くの行事が、十二ヵ月の儀式暦に丹念に採集されているのである。

また、第六章 (The Life Cycle) では、出生、幼兒、少年、青年、結婚、老年、死亡といつた順序に從つて、高島での人々の生活が要約的に記述されているが、民族誌學的報告書は、概ねこの種のライフ・サークルによつて卷尾の飾られるのが常である。これは、記述から次の分析の段階に到る際に、貴重な基礎資料を提供する便宜に富むためであろうと考えられる。

五

ところで、われわれが本書を取上げる場合に最も關心をひかれるのは、「西洋化の衝擊」(The Impact of Westernization) の最後の章であろう。著者は、まず、ナショナル・スケールに基く生活方法の變化を本書では組織的に取扱わないことを告げ、高島におけるそれらの變化の記述とリストの作成に重點を置く。そして、西洋文化の影響が、例えば、衣食住、娯樂、教育、セックスとモレス、

經濟と社會構造、政治行政組織、宗教慣行といつた點で、高島の生活に如何なる變化を與えたかを克明に記述する。西洋文化との接觸による明治以後の急激な產業革命は、貨幣經濟、都市化、交通機關などに著しい變化を招來したが、それらの諸現象の影響は、高島の生活のあらゆる側面にも見出されたと述べる。しかも、彼は、昭和十四年に出版されたエンブリーの有名な「須惠村」の研究と高島のそれとを比較し、兩者の間に强い基本的類似性がみられることから、日本の田舍全體には一つの基本的生活類型が存在すると主張し、高島で認められた西洋化の結果は、他の田舍の諸地域社會のそれにも極めて類似するものと推測しているのである。

しかしながら、人類學的調査研究には、文化を一つの全體として機能的に把握することが要請されるのであり、文化の變動についても、文化過程を一つの全體として理解する立場がとられなければならない。だから、單に衣食住その他の諸項目に分類された變化の外貌やタイプのリストを作成するのみでは、全體としての文化の理解にはおよそ程遠いものがあろう。例えば、明治以後に西洋の制度、知識などの技術的側面を導入したことが、日本文化の他の諸側面に如何なる變化を招いたか、といつた一連の動態的關連性を無視しては、日本文化の理解を充分にする妥當な研究方法とはいえないのである。

ところが、著者は、日本における西洋化現象は、各地域社會によつてその條件と變化の度合を異にするので、それら諸地域社會の記述的比較研究を通して、或る程度、文化變動の機能的關連性の理解に接近しうるものと考えている。高島のような小さな地域社會の一つの研究からは、到底この種の理解に接近しうるものではないが、より廣範なスケールの比較研究が行われれば、日本研究所の意圖する一般課題が、やがて解明されるであろうことに期待しているのである。彼は、このような比較研究の意味において、高島に關する民族誌學的記述の有用性を確認しようとしていると言えよう。このことは、日本研究所の研究方法全般についての一つの傾向を示すものと見做されるのである。

六

以上紹介したところによつても知られるように、本書は、日本研究所の一連の研究體制における重要な一コマとしての役割を擔うものである。とくに、西歐語で書かれた日本漁村に關する最初の民族誌學的研究であるので、その學問的意義は充分に認められてよい。

しかしながら、日本研究所の研究方法、或は、それと繫りのある人間關係地域分類所の調査理論の妥當性は、一應ここで保留して置かなければならない。というのは、彼等の意圖するクロスカルチュラルな普遍化が、彼等の調査技術、研究方法によつてはたして達成されうるかどうか、といつた方法論上の論爭がいまだ解決されないままで現在に到つているからである。それにもかかわらず、日本研究所が、このような「草の根も分ける」ような研究方法によつて、日本における既往の注目すべき多くの承認された一般原理を、取るに足らないものとしてしまつたと主張する段においては、われわれは、少くとも本書に見出される限りでは、彼等のこのような主張にかなりの疑問をいだかざるを得ないのである。

（十時嚴周）